



土木と地質（北村先生を偲んで）

東北開発コンサルタント 北松 治 男

東北電力に勤めていた頃のことである。原子力発電所の建設が間近に迫り、その重要性に鑑みて関係するすべての工学的判断を自社内でできる体制を確立する必要があった。社内には、電気、機械、通信、原子力、化学、金属、土木、建築などの多彩な陣容がしかれていたものの、私の属している土木分野では耐震、地質、コンピューター、水産、環境の専門性が不十分と思えた。電力土木技術者は、自らを総合技術を扱える者と自負しており、それらの分野にも果敢に挑戦していたが、当時精密化してきた活断層調査を契機に、地質の専門家を集め自社内に地質判断力を持つ必要を感じ、上司に進言した。

社内合意が得られて北村信先生にお願いしたところ、愛弟子H君に強く説得して下さった結果、もう1年で博士号を取れるというのをなげうって入社してくれた。彼は、極めて優れた資質に恵まれていたので原子力の地質のような、最先端の部門を形成するには誠に打って付けの人と考えられた。このとき先生は、職場に地質の専門的指導者がいないことを危惧され、まだ未完成の若いH君の地質的教育のシステムを作ることを要望された。電中研にそれをお願いして担当者を決めていただくなどしてスタートすることができた。

数か月後、原子力地点の広域地質調査の発注者として委託者の地質コンサルタントの現地説明を受ける機会があり、1週間山野を歩き回った。H君と同道したが、コンサルタント側にも若い新入社員がいた。T君としておく。当時日本の活断層調査の第一人者として各地で活躍しておられた武藤先生がコンサルタントの責任者であった。とある道路の切通しで、崖の上方に見える線は断層だろうか、とT君に聞いたら、さあどうでしょうかという返事。これを横で聞いていた武藤さんが、身軽に崖を上って、ハンマーでたたいたりして、これはこれこれの成因でこう評価すべきだと丁寧に話してくれた。それだけのことだったが、その夜、T君は武藤さんによって叱られたと言う。恐らく本人は詰まらぬ質問をする素人に、たいしたものではないよと返事をしただけなのだが、一連の対応の中で、専門事項だけでなく、発注者に対する立場とか、礼儀とか、社会人としての新人教育もされたものと解された。余分なことを言ってかわいそうなことをしたと思う一方で、地質専

門仲間への厳しさと、それから数日間同行した中で感じたH君に対する地質技術者独特の連帯感を素晴らしいと思った。他部門の人が地質技術者を育てることはできないし、マンツーマンの指導体制にある職場環境が人材育成に不可欠のものと北村先生の言葉が理解できた。

最近はいくさんの参考書があるとはいえ、土木設計でも結局はOJTが教育の基本である。目の行き届く管理は精々10人までといわれており、直接の人材育成に人を得るか否かは、建設コンサルタント企業での最重要課題である。

その後、社内耐震委員会が作られ、北村先生には電力在籍中を通じて委員として、いろいろとご指導を受けた。目配りの行き渡った包容力が魅力であった。

現在の建設コンサルタント会社に移ったとき、先生はすでに東北大学を退官され、ご自身の研究所を開かれていた。ご挨拶に参上したところ、先生の心境としてこれまでの人生において学の立場で蓄積させてもらった専門知識を、今後は世話になってきた社会に還元していくことを、やり甲斐のある義務と考えている。まだまだやるべきことは多々有り全力を尽くしていくつもりだ。君も、これまでの蓄積のすべてを駆使して、地域のお役に立つことをコンサルタントの使命と考え行動するように。という趣旨の話をして下さった。

先生の国際的な業績と私の小さい実績は較ぶべくも無いし、先生の目指す、高い学識をベースとするコンサルタントと単に設計調査を業とする建設コンサルタントの内容とは大きい差があるが、定年後も盛んな創造的精神を保たれていること、常に次の世代にたいし暖かく指導して下さることに深い感銘を受けた。エデュケーションイズファイヤーリングと高校時代の友人が教えてくれた。人の心に情熱の火を点してやるのが教育の真髄であるという。地質の調査資料につつまれた研究所のなかでそのことを思い、何にも勝るはなむけの言葉と、心の高揚を覚えた。

最近の政治経済の逼塞感の中で、コストダウンの重要性が叫ばれている。日本の国力の維持のためにこの流れは長期間続いていくものと考えられる。土木構造物のコストダウンに当たっては、付与すべき耐震性を含めて、今までよりもっと地盤の工学的判断の質の濃さが望まれてくるであろう。

20世紀末を迎えて、時代は大きく、物質の豊かさの時代から、心の豊かさを併存する時代が変わろうとしている。自然と人の共生がそのテーマであり、地球環境の保全がキーワードとなる。この地球時代における地質は、地球環境の一次診断者として位置付けられると思う。地質学は、地球の生成発展の長期に亘る履歴を踏まえて、今後の人類の発展に

不可欠な情報を与えてくれる分野であろう。

土木は、地上に文明を創造する職業であり、掘って基盤とすべき地質学と深くかかわっている。かつては、地質はあまりにもアカデミックな理学の世界であり、どちらかというところ取り扱う時間感覚の差から実用の世界を離れた存在と信じられることも皆無ではなかったが、今や応用地質の言葉を介して、土木と地質は実用の世界で深く結ばれていることを感じている。

私の属している日本技術士会東北支部で、昨年からは機関誌技術士東北を発行している。副題はガイアパラダイムである。ガイアはギリシャ神話の大地の女神であり、大地に文明を構築する科学技術者の心意気を示すものであるが、奇しくも地質調査業の機関誌名「大地」と同意である事を今回知った、すでに「大地」において、会員の皆様には周知の事柄かもしれないが、ギリシャ神話の引用によって、拙文を閉めることとしたい。

ヘシオドスの神統記によれば、宇宙の生成は、

.....
さて、最初にカオス（空隙）が生じた。次いで、
胸広きガイア（大地）。これぞ雪に輝くオリュンポスの
頂きに住み給う神々すべての永久に揺がぬ御座所。
また道広き大地の奥底なる薄暗きタルタロスと、
さらに不死なる神々の中でも最も美しいエロス（愛）が生まれた。

.....
カオスよりはエレボス（暗闇）とニュクス（夜）が生じ、
さらにニュクスよりはアイテール（高天の気）とヘレメ（昼）とが生じた。

.....
さてガイアは最初に、吾が身と等しい広さの、
星きらめくウラノス（天）を生んだ。吾が身の全体を覆い、
至福の神々の永遠に揺がぬ御座所たるべく。
また高き山々を生んだ。

.....
(ギリシャ神話の世界観：藤縄謙三)

宇宙の最初に生じたものガイア、大地の女神。母なる大地。我々の地質調査にかかわる者の手によって、大地とそこに住む人類文明への仲立ちがなされ、大地の恵みの下に今日がある。そのような意識は古代から現代まで脈々と続いている。そして未来にも。会員の皆様の今後益々のご自愛を祈念申し上げる。